

博士学位請求論文《概要書》

題
目

源氏物語論

——表現の諸相と物語の論理——

氏 名 陣野 英則

博士學位請求論文《概要書》 目次

序章	『源氏物語』の本文と表現	一
I	『源氏物語』の〈語り〉の諸相	二
第一章	作中人物の話声と〈語り手〉	二
	——重なりあう話声——	
第二章	女房の話声とその機能	三
	——「末摘花」巻の大輔命婦の場合——	
第三章	〈語り手〉の待遇意識	四
	——貴公子に対する待遇表現——	
II	光源氏をめぐる〈語り〉	五
	——『源氏物語』第二部とその前後——	
第四章	光源氏をもどく鬚黒	六
	——出来損ないの〈色好み〉が拓く物語世界——	
第五章	六条院世界をみつめる明石の君	七
	——明石の尼君の待遇表現の分析から——	
第六章	秋好中宮論	八

——光源氏世界の内部的崩壊との関わり——	
第七章 六条御息所の死霊と光源氏の罪	九
——死霊の語った言葉の分析から——	
第八章 「柏木・女三の宮事件」後の〈語り〉	一〇
——薫誕生と女房たちの沈黙——	
第九章 光源氏の最後の「光」	一一
——「幻」巻論——	
第十章 「光源氏の物語」としての勾宮三帖	一二
——「光隠れたまひにしのち」の光源氏——	
Ⅲ 『源氏物語』の〈語り〉と〈書く〉こと	一三
——物語世界の話声から現実世界の話声へ——	
第十一章 紫式部という物語作家	一三
——物語文学と署名の問題——	
第十二章 物語作家と書写行為	一四
——『紫式部日記』の示唆するもの——	
第十三章 『源氏物語』と書写行為	一六
——書写者の話声——	
第十四章 『源氏物語』の話声	一七
——ヘテロフォニーの文学論序説——	

本論文は、『源氏物語』の表現の分析・検討を通じ、特にその〈語り〉と〈書く〉ことの問題について、おもに二つの視座から考察を展開したものである。第一の視座からは、『源氏物語』における〈語り〉の諸相を把握した上で、物語世界をささえてゆく論理について考察すること、また、第二の視座からは、『源氏物語』という〈書かれたもの〉としてのあり方について根源的に考察することが、それぞれめざされる。

序章 『源氏物語』の本文と表現

——『源氏物語』の言葉といかに向きあうか——

この序章では、『源氏物語』の言葉がどのような特徴をもっているのか、またどのような世界に存在しているのか、ということなどに関して、まずは基本的な問題点を確認した。次いで、その問題点をふまえ、この物語の言葉といかに向きあうべきかということを検討した。

その結果、本論文のⅠ及びⅡの各章においては、『源氏物語』の言葉が織りなす世界を、いわば完結したテクスト世界として受けとめ、その世界内にとどまってさまざまな分析と考察を展開してゆくこと、一方、Ⅲの各章では、テクスト世界に必ずしもとどまることなく、物語世界の外の現象と物語世界内部との照応関係に注目してゆくこと、以上二つの視座から『源氏物語』について探究してゆくということを述べた。また、本論文がとりあつかう本文に関する問題などにも言及した。

I 『源氏物語』の〈語り手〉の諸相

Iの各章においては、『源氏物語』のテキストにおける〈語り手〉の諸相について、これまでの研究史をふまえながら、その問題点を確認するとともに、特に作中人物たちの話声と〈語り手〉の話声との重なりに着目して、テキスト内部の話声のあり方について検討した。また、〈語り手〉の待遇意識の検討から、〈語り手〉の立場についても考察した。

第一章 作中人物の話声と〈語り手〉

——重なりあう話声——

この章では、古注釈以来の研究史を概観することによって、特に作中人物の話声と〈語り手〉の話声とが重なりあっているような箇所のとらえ方を検討した。さらに、具体例として、作中人物が他者の心中をとらえているかのように語られている箇所に注目し、『源氏物語』における話声の重なり方の特質について考察した。

『源氏物語』の本文では、しばしば作中人物の話声と〈語り手〉の話声とが重なりあっている。そのため、内話、〈地の文〉、〈草子地〉などを厳密に区分することは不可能であるが、区分を意識すること自体は、話声の重なりを見出す契機ともなるので重要であろう。話声の重なりあう箇所、またそうした現象そのものに関しては、これまでさまざまに論じられてきたが、精緻に話声を聴きわけけるような営為が、物語世界の読解には不可欠であると考えられる。その際、〈語り手〉をいかにとらえるかということも問題になる。この物

語の〈語り手〉は、「半ば実体的」というひと言では説明しつくせないが、一方、作中に登場する女房たちを実体化された〈語り手〉と認定することも、大抵の場合は困難である。『源氏物語』の内部には、現実世界の物語の伝播状況に類するものが設定され、語り伝える女房、書き手、編纂者らの話声が幾重にも重なっている。作中の女房たちの話声は、痕跡として、テキストに記されている可能性もあるとみるべきであろう。

ついで、作中人物Aが他者Bの心中を把握したかのように語られている箇所を抽出して、そこでの人物Aのあり方を検討した。そうした箇所において、人物Aは曖昧化することになるが、そのあり方は、まさに『源氏物語』の〈語り手〉の特質にも照応するとおもわれる。

第二章 女房の話声とその機能

——「末摘花」巻の大輔命婦の場合——

この章では、『源氏物語』に登場する女房たちの中でも特筆すべき役割を担っていると考えられる、「末摘花」巻の大輔命婦に着目し、その視点人物としての機能を検討した。さらに、その機能と「末摘花」巻の論理との関わりについて考察した。

大輔命婦は、主上付きの女房である。ただ、乳母子として光源氏と接触する機会があり、また父方の血縁関係から末摘花とのつきあいもある。つまり、この人物は、光源氏、末摘花のいずれかの女房というわけではなく、両者に対して中途半端な立場にある。

『源氏物語』の初めの方の巻々では、一般に光源氏の視点が特権化されているといえる

が、この巻の前半では、光源氏に焦点化することはあっても、その視点から末摘花の姿がとらえられることはない。そのかわりに、専属の女房とはいいたい大輔命婦の視点からとらえられるのであった。また、命婦の心中に即した表現も目立つ。この巻の中心的な視点人物は、光源氏と末摘花の最初の逢瀬場面にいたり、ようやく光源氏へと交替する。

末摘花の醜さと愚鈍さとをある程度隠蔽させることによって、のちに笑いを生ぜしめるという展開は、末摘花に関する知識を充分にもっていない大輔命婦を視点人物とすることによって可能となった。また、われわれ読者が、おぼろげにはあるものの、末摘花の実態を光源氏に先んじて把握することができるのも、大輔命婦が視点人物として機能しているからである。末摘花の「をこ」と光源氏の「をこ」とを同時に、かつは爆笑的に露呈させる「末摘花」巻の論理は、大輔命婦の視点の導入、そして末摘花付き女房の視点の排除と密接に関わっている。この命婦が担っている役割はきわめて大きいといえよう。

第三章 〈語り手〉の待遇意識

——貴公子に対する待遇表現——

この章では、『源氏物語』において、いずれ上達部になることが確実といえるような貴公子たちへの待遇表現に注目して、物語を統括するようなレヴェルの〈語り手〉の待遇意識と、その立場について考察した。

『源氏物語』のいわゆる〈地の文〉での待遇表現にはある程度の原則がみとめられるが、それは絶対的な法則ではない。そもそも、〈地の文〉なるものが確定しえないところに問

— 4 —

題がある。〈語り手〉が作中人物の意識に即している場合には、「思ふ」「おぼゆ」などの叙述が無敬語の表現となる。また、視点人物の敬意の有無を反映した待遇表現もしばしばみられるのである。よって、そうした箇所をすべて除外し、〈語り手〉自身の立場から語っていることが明らかな箇所に限って検討することにより、〈語り手〉の待遇意識、またその立場をさぐることにした。

頭中将、柏木、夕霧らの若い時期の語られ方を検討してみると、一見、無敬語の表現が目立つものの、注意深くみてゆくと、〈語り手〉が作中人物の意識、視点などに寄り添うことなく語っている箇所では、敬意ある待遇を受けていることの方が多いようである。しかし、そうした箇所であっても、敬意が示されない例が若干みられる。それらは、特に当の人物が光源氏と対立、敵対していることを語っているような場合に限られるようである。〈語り手〉は、周到に光源氏という物語の中心を相対化してゆくような姿勢をもちながらも、肝心なところでは光源氏側に位置していることを露呈していると考えられる。

Ⅱ 光源氏をめぐる〈語り手〉

——『源氏物語』第二部とその前後——

Ⅱの各章では、Ⅰの論述をふまえて、特に『源氏物語』第二部（「若菜上」巻、「幻」巻）とその前後に焦点をしぼり、光源氏をとりまく作中人物たちに注目しつつ、〈語り手〉のありようを探究した。さらに、それにもとづいて、第二部とその前後の物語世界に見出

される論理について考察した。

第四章 光源氏をもどく、鬚黒

——出来損ないの〈色好み〉が拓く物語世界——

この章では、鬚黒という人物がいかに関与しているのかを検討するとともに、特に「真木柱」巻に見出されるさまざまな問題点に注目し、物語の中心に位置しつづけてきた光源氏との関係におけるこの人物の存在意義を考察した。

「胡蝶」巻から「藤袴」巻までの鬚黒は、光源氏もしくは玉鬘の意識などを通して語られるのがほとんどであった。また、〈語り手〉から客体化される形で語られる「藤袴」巻の一節においても、本文を精緻に分析してみると、実は光源氏側から語られているということがいえる。

ところが、「真木柱」巻においては、〈語り〉のありようが一変し、鬚黒に焦点化した。り、鬚黒家の召人の視線が活かされたりして、この人物がより立体的に語られるようになる。こうした「真木柱」巻の〈語り〉は、いわば光源氏の〈色好み〉をもどく鬚黒、出来損ないの〈色好み〉としての鬚黒、という人物像を形象化するものと考えられる。鬚黒は、物語の中で、基本的には戯画的に語られる存在ではあった。しかし、それだけの存在ではないのである。鬚黒による〈色好み〉のもどきは、かつての光源氏の〈色好み〉を問いただすことになるだろう。さらには、〈色好み〉を礎とする「光源氏の物語」のありようをもとらえ返して、新たな、よりリアルな物語世界の構築へと向かっていることを示唆すると

161

考えられる。

第五章 六条院世界をみつめる明石の君

——明石の尼君の待遇表現の分析から——

この章では、明石の尼君に対する待遇表現の分析をもとに、「若菜上」及び「若菜下」巻において、明石の君に他者をみつめる機能が与えられていることを指摘した。さらに、六条院世界、あるいは物語世界の中の、明石の君の位置について考察した。

明石の尼君の待遇表現全般をみてゆくと、基本的には敬意ある待遇を受けていないといえそうだが、「松風」巻、そして「若菜上」「若菜下」巻では、尊敬語が用いられている箇所もみられる。まずは、その論理について、〈語り〉の問題として検討した。

「若菜上」巻における明石の尼君の語られ方からは、明石の君が物語世界において他者をみつめる視点人物としての機能を担っている、ということがわかる。さらに、この人物が六条院世界の状況をも認知している、ということを示唆する表現もみられる。六条院世界をみつめる〈眼〉が獲得されたということは、第一部から第二部にかけて、「光源氏の物語」の〈語り〉のありようが大きく変化したことに対応する問題であり、明石の君にも、光源氏と六条院世界を相対化してゆくという役割が与えられているようである。ただ、明石の君の場合は、視点を担うということが、黒子的な女房の立場への接近をも意味しているようであった。そのような形で、この人物は、物語世界の表舞台から去ってゆくものと考えられる。

171

第六章 秋好中宮論

——光源氏世界の内部的崩壊との関わり——

この章では、第二部における光源氏と秋好中宮の関係をさぐり、あわせて秋好中宮の存在意義について考察した。

かつて光源氏が秋好中宮に懸想したことは、第二部ではいっさい回想されない。一方、「若菜上」及び「若菜下」巻では、それまで語られることのなかった、秋好中宮の光源氏に対する感謝の念が繰り返し確認されている。これは、光源氏と秋好中宮との間に新たな関係が結ばれることを示唆しているものと考えられる。秋好中宮の感謝の念が初めて明かされるのは、中宮主催の賀宴のことを語る一節であった。光源氏の四十賀については、その主催者たちの母親にあたる女性（夕顔、六条御息所、藤壺、葵の上ら）の顔ぶれが注目される。とりわけ、物語本文においてつよく意識されているのは、六条御息所と藤壺であるといえよう。いずれも、光源氏の罪の問題に最も関係のある女性たちである。

秋好中宮は、藤壺が産んだ罪の子、冷泉帝の後であり、かつは怨念に猛り狂う死霊、六条御息所の娘である。第二部の物語が、光源氏の罪を深層から問い直すということを主眼にしているとすれば、秋好中宮にとっては、藤壺、及び六条御息所の両者とながりがあるといふことが重い意味をもつことになる。結局は、光源氏の巻き添えをくらうかのよう

第七章 六条御息所の死霊と光源氏の罪

——死霊の語った言葉の分析から——

この章では、六条御息所の死霊が語った言葉を手がかりとして、この死霊が二度にわたって登場するのはなぜなのかという問題を検討した。さらに、『源氏物語』における六条御息所という女性の重要な存在意義についても考察した。

『紫式部集』の和歌を根拠として、六条御息所の物の怪を、光源氏の「心の鬼」、すなわち良心の呵責がうみだしたものとみる合理的解釈がある。そうした解釈には首肯すべき点も少なくないが、「若菜下」巻で死霊が出現する場面の「語り」のありようを検討してみると、光源氏の深層意識がそのまま語られているとはいいきれない。物語は、あくまでも死霊のことをリアルに語っているのである。

そこで、死霊の言葉を、当人の語った言葉として丹念に読んでみると、光源氏及び六条院のありようなどを自在に把握しうる死霊の超越的知覚能力が示唆されている。そうした死霊の特異な能力は、『源氏物語』第二部の物語の論理と大いに関わってくるようである。「柏木・女三の宮事件」という重要な出来事は、御息所の死霊が惹き起こしたといっても過言ではない。そして、御息所という人物には、死霊にとり憑かれる紫の上及び女三の宮との照応関係、さらには物語の深層における藤壺との対偶関係などが見出されるのであった。結局、御息所の死霊は、〈紫のゆかり〉をはじめとする女性たちの懊悩、愛執を惹き起こしてしまう、光源氏という人物の罪を問う存在であると考えられる。

第八章 「柏木・女三の宮事件」後の「語り」

——薫誕生と女房たちの沈黙——

この章では、「柏木・女三の宮事件」がひとまず決着した後の物語、すなわち「柏木」巻後半から「横笛」巻にかけての「語り」に関する諸問題を検討して、正篇を通じて最大の問題がひとまず片付いた後、物語が何をどのように語ろうとしているのかを探った。

「柏木」巻後半では、光源氏と夕霧が視点人物として機能していること、柏木と女三の宮の媒介役であった小侍従が登場しなくなることで、そして光源氏が女三の宮・薫周辺の女房たちの動向を気にしていることなどが確認できる。また、「横笛」巻に関しては、まず「柏木」巻後半と同様、光源氏と夕霧の二人が視点人物として機能していること、女三の宮・薫周辺の女房たちがほとんどあらわれてこないこと、そして子どもたちの「らうがはし」さが頻繁に語られることなどが指摘できるのであった。

光源氏と夕霧のいずれも見えた対象は、薫であった。その薫をめぐる「語り」は、当の視点人物をさまざまな意味で揺さぶることになるようである。それは、二者がお互いに相対化しあうということでもあるが、また、見られる側の薫も、見る側の人物を相対化させている。薫は、そもそも「柏木・女三の宮事件」を想起させる人物であるが、そればかりでなく、周辺の女房たちの不在もしくは沈黙によって、物語内での不安定なありようを決定づけられていることが、見る者たちを揺さぶることにつながっているとおもわれる。

女三の宮・薫周辺の女房たち、そして薫は、その存在自体が「語り」の方法に大きく関わっているらしい。いずれも、女三の宮とのつながりをもつ。ということは、朱雀院の関

— 110 —

係者ともいえよう。「若菜上」及び「若菜下」巻にひきつづき、「柏木・女三の宮事件」後の物語においても、朱雀院側から六条院世界を、特に光源氏を相対化するという論理が見出されるようである。

第九章 光源氏の最後の「光」

——「幻」巻論——

この章では、正篇の最後にいたって、いささか唐突に光源氏の「光」が語られているという問題について検討した。

第二部の光源氏をめぐる物語においては、第五章から第八章でも考察したように、周到な「語り」の方法が駆使されて、光源氏を、あるいは六条院世界を相対化してきたはずであるが、「幻」巻の巻末部では、なぜか光源氏の「光」が確認されている。

「光る君」「光る源氏」などの呼称は、正篇には六例のみで、しかも初めの方の巻々に集中している。また、光源氏の姿を「光」「光る」「かかやく」などとあらわす例は、第二部でも「幻」巻のほかには三例あるが、それらは第一部の圧倒的な「光」とは位相を異にする。第二部では、「幻」巻の「光」だけが異質なのである。

「幻」巻の本文に注目すると、その冒頭にも「光」の語がみられ、「光」を意識している巻であるとわかる。一方、この巻では、「六条院」という場所も、「六条院」という人も、はっきりと客体化されないで、巻末部の「光」こそが擬似的な呼称にも相当するようにおもわれる。それは、とりわけ「桐壺」巻の「光る君」という呼称に照応するだろう。

そこでは、「光る君」と「かかやく日の宮」という藤壺のあだ名が並べられていた。結局、「幻」巻の巻末部の「光」は、正篇の物語を、准太上天皇たる「六条院の物語」としてではなく、あくまでも「光る君の物語」「光源氏の物語」として読者に意識させるとともに、かつての光源氏と藤壺のことをも呼び醒ますことになると考えられる。

第十章 「光源氏の物語」としての勾宮三帖

——「光隠れたまひにしのち」の光源氏——

この章では、勾宮三帖を正篇からたどるように読んでゆくことをとおして、亡き光源氏をことさらに称揚しようとする「語り」の姿勢があること、また、それにもかかわらず冷泉院の晩年を語ることで光源氏の絶対性の失墜をも語っているということなどを論じた。勾宮三帖は、宇治十帖の物語内容と関連づけて論じられることが多い。しかし、「光隠れたまひにしのち……」と語り出される「勾兵部卿」巻は、「幻」巻の巻末部で久々に確認された光源氏の「光」をそのまま踏襲してゆくようである。その「勾兵部卿」巻では、過剰なまでに光源氏を讃えつつ、しかも光源氏と対比する形で勾宮と薫の欠点をあげつらっている。また、そうした評価は、次の「紅梅」巻の紅梅大納言の発言にもたびたびみられる。「紅梅」巻では、勾宮の宮の御方に対する関心が語られながらも、結局、恋の物語は進展しない。この巻には、若き日の光源氏と違って何ら行動を起こせない勾宮を貶め、光源氏のすばらしさを再確認するという論理があるのだとおもわれる。

「竹河」巻の場合は、「勾兵部卿」及び「紅梅」巻に較べれば、物語内容が充実してい

— 121 —

るが、やはり光源氏を称揚しつつ、薫を相対化するような傾向がみとめられる。一方、この巻では、「はえなき」冷泉院のことが語られているが、これによって、光源氏の絶対性あるいは王権が地に堕ちたことをも明らかにしようとしているだろう。

勾宮三帖は、結局、「光源氏の物語」そのものというべきである。ここでは、第二部でかすれかけていた「光」が語りつけられることによって、「六条院」ではなく「光る君」「光る源氏」という主人公の印象があらためて読者に焼きつけられるのである。

Ⅲ 『源氏物語』の「語り」と「書く」と

——物語世界の話声から現実世界の話声へ——

Ⅲの各章においては、これまでのⅠ・Ⅱにおける論考がテキスト世界の解釈を志向していたのに対して、積極的にテクストの外へも向かってゆくことにした。すなわち、テクストが示唆する「語り」と「書く」ことの諸問題との照応関係をさぐりつつ、物語作家、書写行為などの問題について考察した。

第十一章 紫式部という物語作家

——物語文学と署名の問題——

この章では、物語作家の無署名という問題を手がかりに、物語文学、あるいは物語作家

の普遍的なあり方を確認した上で、紫式部という物語作家の特異性について考察した。

物語文学作品には、〈書かれたもの〉であるにもかかわらず、物語作家の署名がない。

物語文学は、仮名文字を用いている。そして、(韻文をも含んでいるとはいえ)基本的には散文である。さらに、物語文学は、事実ではなく虚構の世界を書き記したものである。

これらの三点は、物語文学が正統性に欠ける文書だということを意味しており、無署名という問題にも深く関わっているとおもわれる。一方、物語作家という概念自体が、当時はなかった可能性もあろう。だが、物語文学は、そうした劣性を逆手にとっている。口頭で語られた言葉を装う物語文学にとっては、無署名であることがむしろ当然であった。また、署名を付さないことによって作品そのものの起源を隠蔽し、現実世界を批判する力、さらには物語のリアリティを獲得しているようである。

しかし、物語文学作品の中でも、『源氏物語』に限り、特殊な問題がある。当の物語作家が、『紫式部日記』の中で、自分が『源氏物語』の作家だということをほのめかしているからである。その『源氏物語』(あるいはそれらしき物語)への言及箇所をみてゆくと、自作をしたたかに宣伝しているようにさえおもわれる。だが、その一方で、物語と自身との断絶、あるいは物語作家としての自身を軽蔑しようとする姿勢なども書き記されているようである。宮廷、そして貴族社会で評判になった『源氏物語』とその作家は、もはや一般的なものではない、一般的な物語作家のありようから逸脱してしまっているのである。

第十二章 物語作家と書写行為

『紫式部日記』の示唆するもの

114

この章では、第十一章にひきつづき、『紫式部日記』における『源氏物語』(あるいはそれらしき物語)への言及箇所を検討して、そこでの問題点と、『源氏物語』自体の〈語り〉と〈書く〉こととの照応関係を探究した。

『紫式部日記』では、物語の作中人物、もしくは物語内容と結びつけられることを拒むような紫式部の態度が記されている。また、物語作家としての自負、あるいは宣伝に相当するような叙述を織り込みながら、実は、物語作家としての自身の姿をかなり屈折したものと提示している。そして、厳密な意味での創作行為自体には言及せず、そのかわりに、『源氏物語』を読み、修正し、編集するという自身の行為を書き記している。また、作品が書写行為によって伝播してゆくこと、物語作家の自筆本が数種類あることなども示唆されている。

これらの点を確認してみると、『紫式部日記』では、物語作家としての自己ではなく、(「書きかへ」などをも含む)伝播・流布に携わった者としての自己自身に焦点を当てているようにおもわれる。つまり、『紫式部日記』では、伝播過程の一員としての自己を、ことさらに演出しているかのようなのである。

『源氏物語』の言葉は、作中人物の言葉から、主要人物に近侍する女房などが見聞したことを語る言葉、それを聞いた人が書き記した言葉、さらに、それを読む人、書写する人の言葉……というような連鎖としてとらえられる。そこには、『紫式部日記』の示唆する〈書く〉こととの照応関係が見出せるであろう。『源氏物語』と『紫式部日記』とを積極的に関わらせてゆくならば、『源氏物語』の言葉は、物語内部に設定されている伝播の連

鎖をひき受ける、紫式部という筆記編集者を経て、さらに現実世界の読む人、書写する人たちの言葉がたつらなっていてゆくという大きな連鎖として理解できるのではないか。

第十三章 『源氏物語』と書写行為

——書写者の話声——

この章では、第十二章の論述をうけて、青表紙本系統の「夕顔」巻にみえる誤写と考えられる箇所を手がかりに、本来、別次元にあるはずの物語世界と現実世界とが、書写行為によってつながれるということの意義を考察した。

青表紙本系統の「夕顔」巻には、光源氏の会話文「けうとくもなりにける所かな……」の少し前、いわゆる「地の文」に「いとけうとけになりにける所かな」という本文がみられる。これは、一般に誤写と考えられよう。光源氏の心中に即した表現とみることもできなくはないが、その場合、ほとんど一致する表現がくりかえされていることがうまく説明されない。これについて、上野英二氏は、単なる「目移り」による誤写ではなく、書写した人が物語世界あるいは光源氏の心情と同化して洩らしたものととらえ、さらに、こうした異文を発生させる書写行為が、原作者の「書きかえ」にも匹敵すると位置づけられた。この指摘は首肯されるが、物語世界内部にも書写行為が設定されているということとの照応関係にこそ留意すべきであるとおもわれる。

書写行為によって、本来別の次元にあるはずの物語世界と現実世界とが結ばれると考えられるならば、物語作家という概念は、問い直されねばなるまい。また、『源氏物語』の

本文は、「書きかえ」の連鎖としてとらえられるのであり、「書きかえ」が重ねられた結果として現存諸本があるということをもう少し積極的に評価すべきだとおもわれる。さらに、物語内部に設定されている書き手は、かつて実在した、読者としての書写者に対して物語のリアリティをもたらししているとも考えられる。

第十四章 『源氏物語』の話声

——ヘテロフォニーの文学論序説——

この最終章では、I及びIIIの各章における検討・考察をふまえ、『源氏物語』において話声が幾重にも重なりあうという現象をもたらし論理、あるいは原理を探究した。また、その論理、あるいは原理にもとづくような「読む」行為を想定し、『源氏物語』、さらには物語文学全般に関するこれからの課題について、見通しを述べた。

『源氏物語』の言葉に関する、今日の代表的な理論としては、高橋亨氏の「心的遠近法」、三谷邦明氏の「言説分析」などが知られている。いずれも、ミハイル・バフチンの文学理論をふまえ、「ポリフォニー」あるいは「対話」という術語も用いられている。しかし、『源氏物語』における多声性は、個々の独立した話声が「対話的關係」にあるというようなものではなく、作中人物の話声から、語り伝える人、書き記す人、編纂する人たちの話声、さらにはかつて実在した読む人、書写する人たちの話声へと重なりあいながら、ときには微妙にずれているといったものである。これを音楽になぞらえるのであれば、「ヘテロフォニー」こそがもっともふさわしいと考えられる。

『源氏物語』における言葉のありようをヘテロフォニーととらえるとき、かつて実在した書写者の独自の語声は尊重されるべきだとおもわれる。また、読者（である「私」）と作品との「対話」によってダイナミックな意味を生成させるポリフォニー的なへ読みへに對し、ヘテロフォニー的にへ読みへ行為の可能性も考えられる。さらに、女性主要人物たちの關係、宇治十帖の薰と匂宮の問題など、作中人物のあり方、物語内容のあり方などについても、ヘテロフォニーとの照応が予感される。一方、『源氏物語』以外の物語文学作品などに関しても、ヘテロフォニー的なものが見出される可能性があるとおもわれる。